

# 「学貴日新」（学んで日に新たなるを貴ぶ）について



## 解題

この扁額は、東洋史学の創始者として令名の高い故内藤湖南博士（本名虎次郎、1866～1934）が、1930年に、博士の母校である秋田県師範学校（本学教育学部の前身校）の保戸野校舎新築落成記念として同校に贈られたもので、それ以来、終戦に至るまで、同校の玄関廊下に掲げられ、師道を志す多くの若き学徒の教育指標として仰がれ続けてきたものである。長い年月を経て汚損もひどく、大学発足後は教育学部長室の書棚の一隅に埋蔵されていたが、この度、旭水会の御好意によって美装され、図書館当局のご快諾をえて、再び大学教職員や学生諸君の前に展示することができることとなった。

ここに録された「学貴日新」の四文字は、人の子の師たらんと志す者はまず以て学問的研鑽と創造の業にいそしむ者でなければならないという、博士の信念を吐露された後輩への遺訓であると思う。「学は日に新たなるを貴ぶ」というのが普通の訓みであろうが、私

はこれを、「学んで日に新たなるを貴ぶ」と実存的によみとって、怠惰に就こうとする自らへの戒めとすると同時に、学問的探究によって日々新たな自然観や人生展望に恵まれる学習者としての悦びの念を催起し、こうして多様な価値観点を自らのものとすることによって、ゆとりある豊かな心を以て生きることの幸せを味得したいものと願っている。そして、そのような学習態度を身につけた者のみが、人の子のもつそれぞれ多様な資質や才能を発掘し励まし導いて、その全面的な開花発達を促すことができると思うので、この四文字は、全大学人の生活指標たりうるものであるが、わけても、教育者たろうと志す教育学部学生諸君にとっての研学指標として、まことにふさわしい遺訓であるように思う。

(1982. 12. 20 教育学部長 工藤綏夫 記)

#### 付記

「日新」は秋田市立日新小学校や会津の日新館などにも使われている。中国の古典である四書の一つ「大学」に記されており、殷王朝（紀元前17～11世紀）の創始者である湯王が使っていた盤（洗面器）の銘文に以下のように記されていたとされる。

苟日新 苟（まこと）に日に新たに

日日新 日に日に新たに

又日新 又日に新たにせんと

その日、自分を新たにするように努力し、さらに次の日もその次の日も自分を新たに、さらに毎日新たにしていかなければならない、つまり常に自分を刷新し、新たなものに挑戦し成長発展し続けなければならない、現状に安住してはいけないことが述べられているのである。

また、「易経」の繫辞上傳に、

富有之謂大業 富有（ふゆう）、之（これ）を大業と謂い

日新之謂盛徳 日新（にっしん）、之を盛徳と謂う

と記されている。経済的にも精神的にも豊かであることは、大いなる事業であり、毎日自分を刷新し続けることは、立派な徳行である、ことを述べている。これに関わる四字熟語「盛徳大業」という言葉は、高潔な徳を成し、大業を成し遂げること、すなわち内面と外面がともに絶頂である状態を指している。

(2015. 9. 30)



### 【内藤湖南】

1866年8月27日鹿角郡毛馬内（現鹿角市）生まれ。1934年6月26日京都にて死去。

本名は内藤虎次郎。1883年3月、17歳で秋田師範学校中等師範科に入学。1884年、高等師範科への編入学試験に合格し、1885年7月に同科を卒業。卒業後、綴子（つづれこ）小学校の主席訓導（実質的に校長）となる。

1887年に上京後、東京、大阪などで新聞・雑誌等の編集・執筆に活躍する。1907年に京都帝国大学文科大学史学科東洋史学講座講師となり、1909年から1926年の定年まで教授を勤めた。

秋田大学中央図書館に内藤湖南コーナーが設けられ、『内藤湖南全集』（全14巻）など関連書籍等が展示されている。「学貴日新」の扁額はこのコーナーに展示されており、旭水会（教育文化学部同窓会）の百周年モニュメント（教育文化学部2号館南側）にも刻まれている。